

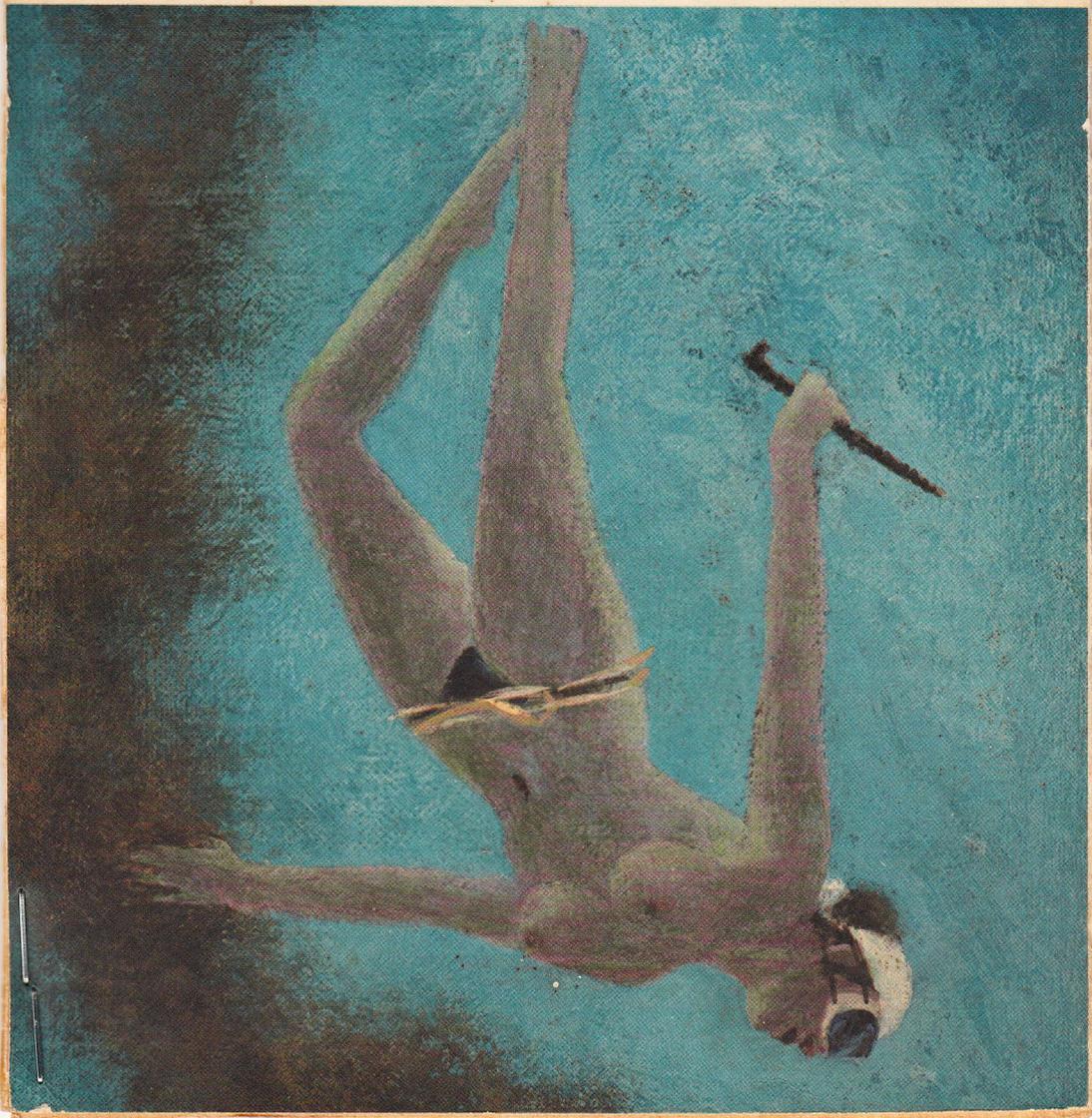
文藝春秋

特別手記 私の原爆忌

「ヒロシマ」を憎む

八月号

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
昭和四十六年八月十五日発行毎月一回日発行
第四十九卷第十号
特別郵便物認可第三十九号



私は「ヒロシマ」を憎む

一度退散するとみせて再び飛来、防空壕から
でた瞬間を襲った卑劣なトリックを許せない

慟哭の原爆忌

若木重敏
(協和酸酵・常務)

窓から首を出して青空を眺めていた私は、ふと名状しがたい一種の不安な気持ちにおそわれた。

電話が鳴った。ホノルル醸造の二瓶さんの奥さんからである。聞けば、今からお客さんを真珠湾やバイナップル畑などに案内するので、私も参加しないか、というお誘いである。私は、出張報告をまとめなければならぬ旨を答えて電話をきった。

真珠湾——二瓶夫人がそのことばを口にしたとき、私は、ハワイの空をみながら感じていた漠然たる不安の謎が解けたような気がした。「真珠湾」は私に、第二次大戦の開始を思い出させ、それは、また大戦の終結となった広島原爆の閃光と結びつき、その原爆の

一九七〇年六月二十日、一カ月余りの忙しい米国出張の帰途、私はハワイに立ち寄った。ワイキキの浜辺に近いホテルで目覚めたのは朝の五時。きょう一日は、ホテルで出張報告をまとめ、明日は日本に帰る予定である。私はベッドに寝そべり、五時半から十時ごろまで報告を書きつづけた。

窓外には熱帯の陽光がさんさんと降りそそぎ、椰子の葉がそよ風にそよぎ、白壁の数十階建のホテルが青空にそびえている。窓を開け放つと、暖かいしかも湿り気の少ない風が頬をなで、ワイキキの浜辺のかすかなざわめきが伝わってくる。目をあげると、蒼い蒼い空がひろがり、そこには小さな巻雲がうかんでいた。

中で私が偶然生き残ったこと、その生き残りの原因となった数個の白桃のこと、その白桃を私にくれた当時女子挺身隊員だった岡田さんのこと、その岡田さんが今看護婦として働いているこのパール・シティのこと……連想が見事に環をなしてつらなつたからである。そういえば、今日のこのハワイの蒼い空と白い巻雲は、二十五年前によく寝ころんで眺めた広島原爆の空を思い出させる……

虚無的な楽しみの日々

思い出は今から二十五年前、昭和二十年にさかのぼる。

私は、当時海軍の技術士官として、呉の海軍工廠の砲熷実験部弾薬科に勤務し、その理化化学班の班長であった。

砲熷実験部というのは、第二次大戦中、海軍の火砲関係の新兵器研究の主力となった研究機関である。

開戦当初、対空兵器として活躍した花火形に弾片のとび散る三式対空弾（これは「陸奥」自沈の原因となったといわれるものが……）、米国の潜水艦を脅かした対潜弾、ソロモン諸島で米空軍基地におとされた時限爆

弾、硫黄島で米軍を手こずらせたロケット弾、あるいは戦車用の棒地雷や「特攻炸弾」という特殊兵器、上陸用舟艇防衛に威力を発揮した三式迫撃砲信管など、数多くの兵器がここから生まれたのであった。

私の担当していた班は、技術担当の士官が私のほか和田大尉と飯村大尉、それに技手が四人、工長四人をチーフとする約四十人から成っていた。そして新兵器に必要な特殊火薬、無ガス導火薬、起爆薬、化学時限装置、曳光弾光薬、簡易ロケット推進薬など主として火薬関係の基礎と応用を担当していた。

昭和二十年のはじめ、この理化化学班の半分が、広島文理大学の中の物理・化学実験室に疎開することになった。戦況が悪化するにつれて、呉軍港への空襲がひんばんになり、仕事がいよいよなくなってきたこと、広島文理大学の数学、物理、化学の教授の方々が、積極的にわれわれに協力してくださる態勢をとられたこと、またわれわれも教授の知識を借りたかったことなどが移転の理由であった。そして、私は、その分遣研究所のチーフということで、主に広島に通うことになったのだ。正直に言って、当時の私は、私たちの研究